

中等部第2回

# 国語

令和8年2月2日実施

50分

2026年度

## 〔受験上の注意〕

- 一、問題は〔一〕～〔三〕まであります。
- 二、解答時間は五十分です。
- 三、解答用紙はこの冊子の最後にあります。解答は解答用紙の所定のところに書いてください。
- 四、問題冊子・解答用紙に、受験番号・氏名を記入してください。

受験番号	氏名

〔一〕 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。なお、設問の都合上、本文には表記を変えたり省略したりした部分があります。

スポーツ専門のカメラマン多々良智司は、スポーツ雑誌「ゴールドスピリット」(ゴルスピ)の新編集長である小倉香菜から、目玉企画に将棋をスポーツとして特集したいと打ち明けられる。史上最年少でプロ入りした天才中学生棋士、明智昂のプロ初戦を撮ってきてほしいと依頼を受けた多々良は、対局当日、会場である将棋会館へ向かった。明智の対局相手は、十五年ほど前に天才中学生棋士と騒がれたが、それ以降大きな活躍のない座間隆嗣である。

将棋会館に入ると、エントランスは独特の匂いがした。ほのかに甘い木の香りに、畳のい草の匂いが混じっている。冷たい匂い。だが、これから温まっていくのがよくわかる匂い。

不思議と、先ほど感じた新国立競技場の匂いと似ている。

将棋連盟の人間だろうか、エントランスに入っすぐ、座間は誰かと話していた。「今日はメディアの取材がすごいよ」と苦笑いする男性に、座間が「あはは」と笑う。目の色が全くもってさつきと変わっていない。

「さすが、明智君ですね」

座間がそう言ったのがはつきり聞こえた。あまり張りのない擦れた声だった。

メディア向けの受付には、撮影機材を抱えた人間が殺到していた。みんな同じような格好なのに、一目で将棋雑誌の人間でないとわかる。多々良と同様、明智昂のために慣れない将棋会館へ派遣されたのだろう。

受付を終えた直後、スマホに着信が入っていることに気づいた。スマホの画面に表示された080から始まる番号

には、見覚えがない。

何度もしつこくコールされるので、エンタランスの隅に移動し、通話ボタンを押す。

『あ、もしもし?』という声を聞いてすぐ、相手が誰だかわかった。

『多々良さんのスマホですよ? 無事受付できましたか?』

まるでこちらを見ていたかのように、小倉が尋ねてくる。

「ええ、無事終わりました。予想はしてましたけど、かなりのカメラの数ですね」

『今朝のワイドショーも明智昂のデビュー戦を特集しましたから。この調子だと、藤井聡太のときみたいに、昼ご飯に鰻を注文したとかフルーツを食べたとか、そんなことまで話題になるでしょうね』

「それで、編集長直々に何のご用ですか? どうしてもほしい画角があるなら早めに言ってください。極力狙いますから」

小倉は笑い交じりに『いえ、違うんです』と言い放った。

『対局中の写真がイマイチだったら、インタビューの日に将棋を指す振りをしてもらって、それを表紙にする手もあるので、気軽に撮影してきてください、と伝えようと思って』

眉間の奥に小倉の声がスンと差し込んで、短い鈍痛に変わった。東京オリンピック閉幕時に師匠から『あなた、それでもスポーツカメラマンになりたい?』と挑発されたことを思い出す。

挑発……そうだ、あれは確かに挑発だった。そして小倉の言葉も、挑発なのだ。

「小倉さん、ゴルスピの前はこの部署にいたか知りませんが、カメラマンをその気にさせるのが上手いですね」

『え、そう受け取った? 私は本当に純粋に、肩の力を抜いた方がいい写真が撮れると思って』

一ミリもそう思っていない顔を、電話の向こうで小倉はしているだろう。一度しか会っていない小倉の顔が、ありありと浮かんで消えない。

これは、意地でも撮らなければならない。スポーツ雑誌の表紙を飾る一枚。恐らくスポーツ雑誌の表紙として初めて、将棋をスポーツとして写した写真を。

オリンピックをきっかけにスポーツ嫌いが増えたと、青木は言った。多々良もそう思う。小倉がゴルスピで将棋を特集しようとするのも、それに近い問題意識がある気がした。

※あの日、お前はスポーツカメラマンになりたいのかと師匠に挑発された日、多々良は彼女にこう答えた。

——その分断されちゃった社会を、スポーツがもう一度繋げられるように、撮りたいんですよ。

今更ながら青臭さと幼さに虫酸が走って、身震いがした。そうだ、俺も結構酔っていたのだ。六甲ビールが美味かったのがいけないのだ。

「……さあ、撮るか」

撮影の場所取りをするために、カメラマン達が動き始めた。荷物を担いで、多々良も対局室へ向かう。通路を歩きながら、両目をぎゅっと閉じた。カッと見開き、また閉じる。何度もそれを繰り返して、自分の眼球に語りかける。

カメラは、カメラマンの目だ。カメラマンが美しいと思ったものは美しく写り、尊いと思ったものは尊く写る。

② さあ、いいか。撮るぞ。

対局室に入り、場所取り争いに飛び込んだ。カメラマンとカメラマンの間に体をねじ込み、明智の顔が狙える場所を確保する。

九時半を回り、メディアの姿が増えていく。スチール、動画問わず、次々とカメラマンが現れた。徐々に身動きが取りづらくなっていく。できるだけ身軽になりたいからカメラ一つで入室したのだが、カメラを何台も肩から提げた者もいれば、三脚を立てる者もいる。

多々良達カメラマンは、対局中ずつと撮影が許されているわけではない。序盤は初手が指されるまでしかシャッターを切れず、昼休憩明けは順位戦を主催する新聞社と将棋連盟のカメラマンしか入れない。それ以外の撮影チャンスは終局後だ。

ならば、山場は序盤も序盤。初手が決まるまでだ。誰もが、明智昂が座る下座側が撮りやすい位置を確保していた。

対局室の中央には、将棋盤と、座布団が二つ。無人の将棋盤を多々良は写真に収めた。モニターで明るさを確認し、シャッタースピードと絞りの具合を変え、もう何枚か撮る。

九時四十分ちようどに、座間が現れた。一礼して入室すると、その様子を写真に収めるカメラマン達を一瞥し、上座に着く。くたびれたリュックから、ペットボトルのほうじ茶とエナジードリンクの缶を取り出し、傍らのお盆に置いた。

座間の表情は、先ほどと一緒だった。照明のスイッチを切るように、多々良達を意識の外に追い出す。伏し目がちに盤上を見つめたまま、ぴくりとも動かない。スーツを着込んだ横顔からは、頬がぴりりと痛くなるような音が放たれていた。

座間は今、自分のデビュー戦のことを思い出しているのかもしれない。そのときもこんなふうメディアが詰めたのだらうか。胸の内で「何年たっても変わらないな」と笑っているのか、それとも「さすが、明智君ですね」と

肩を落としているのか。

明智昂が現れたのは三分後だった。

「おはようございますっ」

弾んだ声で挨拶し、にこやかに一礼して入室した瞬間、再びシャッターの音が響く。学校の制服なのだろうか、濃紺のブレザーはむせ返るような爽やかな色合いだった。

シャッター音は座間のときより明らかに数が多く、長かった。多々良も、明智の写真は座間より多く撮った。少しずつ、カメラマン達の心拍数が上がっていくのがわかる。

明智は随分リラックスしているようだった。表情も穏やかで、笑みを浮かべたまま座間に会釈する。座間は木の枝が折れるようなささやかないお辞儀をした。

二人はしばらく無言で盤上を見つめていたが、どちらからともなく顔を上げたかと思うと、互いに一礼し、上座の座間が駒箱を開ける。

盤上に駒が広がる。多々良の覗くファインダーの中で、王の駒が音を立てて転がった。  
王に、座間の指が伸びる。

節の目立つ、細長く色白な指だった。その指が、王を自陣に置く。カン、という鋭い音。炎が爆ぜるような、高らかで、鮮やかな音。

気がついたらシャッターを切っていた。

駒に念を込めるような力強い動きに、レンズが吸い寄せられる。座間の手首、腕、肘、肩と舐めるように移動し、彼の顔を捉える。

座間の目には、すり切れそうな緊張感が宿っていた。眼鏡のレンズに対局室の照明が反射し、青く光る。見開かれた白目がほのかに青く染まり、炎が燃え上がるみたいに揺れる。

多々良と同じように、明智もその炎を見ていた。下座の明智が玉を取って自陣に並べる。一つ、また一つ、座間と明智は交互に駒を並べていく。

座間の手の動きを目で追いながら、明智はしきりに右手の指先を左手で押さえていた。彼の右手中指が微かに震えるのを、多々良は見逃さなかった。

緊張か、畏縮か、武者震いか。明智本人も区別できていない顔をしていた。

右手を押さえながら、彼は笑っていた。メディアの前で見せるアイドルのような華やかな笑顔ではなく、自分の中から湧き上がるものを必死に押さえ込もうとする笑みだった。

それでも、見開かれた両目は、座間の指先を放さない。

まだ対局は始まっていないのに、ただ駒を並べているだけなのに、指が勝手にシャッターボタンを押す。カシヤカシヤカシヤという乾いた音が、少し前に聞いた虫の羽音を思い出させた。どうかこの音が、彼らの高ぶりに水を差しませんようにと祈った。

駒を並べ終えた二人は、無言のまま対局開始時刻を待った。

その間も、シャッターの音は鳴り止まない。対局開始の十時はあつという間に来た。

「——それでは時間になりましたので、明智先生の先手番でお願いします」

記録係の合図に、二人が同時に頭を下げ、「よろしくお願いします」と言葉を交わす。対局室にシャッターを切る

音が小刻みに響く。木々のざわめきのようだった。

目を伏せていた明智は、短い深呼吸をして、唇を引き結んだ。つかの間、微笑みが消える。瞬きを三度すると、またすぐに口元をほころばせる。

明智の手が盤上に伸びる。もう右手の中指は震えていなかった。

軽やかな動きだ。綺麗な爪をした指先は飛車の前にあった歩を取り、すつ……と音もなく動かす。それだけの動きを捉えるために、すべてのカメラマンがシャッターを切った。

初手を終え、彼はわずかに白い歯を覗かせて微笑んだ。澄んだ瞳だけが笑っていない。眼球が煮えたり、血走って見え見え。天才が天才として、選ばれし者達がしのぎを削る世界に飛び込んだ瞬間の顔だった。

こんな表情を、多々良は何度も撮ってきた。今も活躍する選手もいれば、早くに姿を消した選手もいる。才能の炎が燃え続けられる時間は、決して平等ではない。何年も燃え続けられる天才もいれば、一瞬だけ強く輝いて、二度と光らない天才もいる。

明智昂はどちらだろう。そんなことを思いながらシャッターボタンを押した。カメラマン達が「一仕事終わったな」という顔をする中、多々良は体の向きを変える。隣のカメラマンの懐に入り込むような体勢になったが、体格差があるから邪魔にはなっていないはずだ。仮に邪魔だったとしたら、後で苦情も聞かしくし、きちんと謝罪しよう。

④ どうしても、座間を撮っておきたかった。

写真を撮る行為をスポーツにたとえるなら、陸上の跳躍競技に似ている。跳び越える対象を睨みつけ、体の節々に「準備はいいか」と問いかけ、助走し、踏み切って、跳ぶ。

撮影時間が何時間あると、「ここだ」という瞬間は短い。走高跳や棒高跳の選手がバーを越える一瞬、走幅跳

の選手が砂上を跳ぶ一瞬——本当に、それくらいの間だ。

今日の撮影の「ここだ」がどこかと聞かれたら、間違はなくここだった。

座間は、明智の初手をじっと見ていた。姿勢よく、川の流れても眺めるような顔で。

そんな彼を撮った。座間と呼吸を合わせ、三枚。喉の奥が痙攣して、声が出そうになる。

レンズを通して、座間の体をひたひたに満たした感情が流れ込んでくる。多々良はそれを掴むことができない。圧倒され、呆然として、気がついたら何も残っていない。激流は座間の中に帰っていつてしまふ。

自分には手の届かない場所で、<sup>⑤</sup>巨大な炎が燃え上がっている。それを写真に収めるのが自分の使命だ。

この一枚も、きつと、そういう一枚になる。

かつて光り輝いていた星が色褪せ、熱を失い、消えていく過程の一幕を切り取っているだけかもしれない。座間はこの順位戦で再び降級点がつき、フリークラスへの降級が決まり、それをきっかけに引退するかもしれない。落ちていく星が最後に燃え上がったのが、今かもしれない。

それでも、同じ人間じゃあねえな、と思う。

どれだけ色褪せてしまっても、それでも、座間はレンズの向こうで燃え上がっている。

——さすが、明智君ですね。

将棋会館に集まったメディアの姿を横目に、座間はそう言った。かつて自分を天才と崇め奉ったメディアが、明智に群がる様を見つめながら。

明智を目障りに思っているかもしれない。妬ましいかもしれない。座間の経歴を知らば知るほど、見る側は勝手な物語を作り、座間の胸の内を勝手に想像する。

けれど、そんなことはファインダーの中ではどうだってよかった。

本当の天才は、戦いの場で丸裸になるのだ。かつて天才中学生だったとか、今、天才中学生だとか。そんなことは何一つ関係なく、ただ、今と今がぶつかり合う。

その熱は、見る側がどれだけ怒りや不幸や理不尽を背負い込んでいても、一瞬だけ、それを忘れさせる力を持っている。そうであってほしいと思う。

明智の初手の後、カメラマン達は一斉にカメラを置いた。

多々良は、カメラを構えたままだった。

顎に手をやり、座間はしばらく動かなかった。やがて、重力に抗うように、ゆっくりゆっくり右手を伸ばし、明智と同じく飛車の一つ前の歩を取る。

パチンと駒が鋭い音を立てる。鋭い火花が散ったように見えた。シャッターは押さなかったが、多々良はそれをファインダー越しに見ていた。

スポーツだなあ、と堪らず微笑んだ。

(額賀滂『天才望遠鏡』文藝春秋)

※青木……「ゴールドスピリット」の編集者。

※あの日……東京オリンピック閉幕の日。師匠は「オリンピックの名のもと、スポーツは社会を分断する斧にされちゃったのかもねえ。」と言った。

※青臭さ……未熟さ。

※虫酸が走る……吐き気を感じるほど不快な気持ちになること。

※一瞥……ちらと見ること。  
※ファインダー……カメラに取り付けられているのぞき窓。  
※王の駒……将棋の駒のひとつ。この後の、「玉」「飛車」「歩」も同じ。  
※畏縮か、武者震いか……「畏縮」はおそれて小さくなること。「武者震い」は戦いや重大な場にのぞむとき、心が勇み立って体がふるえること。  
※しのぎを削る……はげしく争う。  
※抗う……抵抗する。

問一 〓線部A・Bの語の本文中における意味として適切なものを、次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

A「くたびれた」

- ア 長年使って良い味が出た
- イ 使い古して傷が多く残った
- ウ 長く使ってみすぼらしくなった
- エ 使いすぎて使用するのが難しくなった

B「ぎこちない」

- ア 堅苦しい
- イ よそよそしい
- ウ 気をつかうような
- エ 不自然な

問二 〓線部①「その気にさせる」とありますが、ここでの「その気」の内容を七十字以内で具体的に説明しなさい。

問三 〓線部②「さあ、いいか。撮るぞ。」とありますが、このときの多々良の心情や様子を説明したものとしてもっとも適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 待ちに待ったその瞬間が訪れようとしていることへの緊張をおさえるため、落ち着くよう自分に言い聞かせている。
- イ 編集長の望むような写真が撮れるのかは不安だが、ここからはとにかく集中してその瞬間を撮るのだと、意気こんでいる。
- ウ 自分が心を動かされるその瞬間を撮るために、カメラを通す自分の目に準備はいいかと語りかけ、気合を入れている。
- エ 写真を撮る前にいつもしている自分への語りかけを行うことで、安心してカメラを構えられるように気持ちをととのえている。
- オ 美しく尊いと思う瞬間を撮るためには、自分自身を信じるのが何より大切なのだと、心の準備を万全にしている。

問四

X に入れるのにもっとも適切な語を次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 緊張感
- イ 臨場感
- ウ 充実感
- エ 使命感
- オ 不快感

問五

線部③「自分の中から湧き上がるものを必死に押さえ込もうとする」とありますが、このときの明智の様子や状態を説明したものとしてもっとも適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア デビュー戦でしつかり勝利をおさめたいという意欲がおさえられないほどに高まり、なんとかこらえようとしている。

イ 対局相手の座間への対抗心と、勝利への執着心が同時にこみあげてきて、自分でもどうすればよいか分からず困惑している。

ウ 今日がプロとしての初戦であり、それに対するおそれや喜びなどさまざまな気持ちがかみあげてきて、始まるのが待ちきれないでいる。

エ これから対局が始まる緊迫した状況の中で、おさえられないほどに高ぶってくる気持ちを必死に落ち着かせようとしている。

オ このプロデビュー戦に楽しんで取り組もうという思いと、今の実力を見せつけたいという思いがわきあがり、興奮している。

問六

線部④「どうしても、座間を撮っておきたかった。」について、次のⅠ・Ⅱの各問いに答えなさい。

Ⅰ 多々良がなぜそう思っているのかを、端的に述べている一文をこれ以降の本文中から探し、最初の六字を抜き出して答えなさい。

Ⅱ 座間のどのような姿を撮りたかったのかを二十字以内で答えなさい。

問七

線部⑤「巨大な炎」とは何を表したのですか。「くの炎」に続く形で、五字で答えなさい。

問八

本文の表現や内容に関する説明として、もっとも適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 肝心な場面で周囲の人の言葉によって多々良の心情が揺れ動く様子が、淡々とした描写の中で繊細に表現されている。

イ 多々良の視点から語られることで、明智と座間の才能がぶつかり合うはげしさと緊迫感が、読者にとって臨場感あるものとなっている。

ウ 燃え上がる「炎」を繰り返し描写することで、座間の姿に目を奪われる多々良の心の動きが読み取れるように工夫されている。

エ 過去を回想する場面を差しさむことで、天才中学生棋士ともてはやされていた座間の、現在の悲惨な状況がより明確に表されている。

オ 多々良の視点から明智と座間の様子が語られることで、二人の心情を読者がさまざまに想像できるように意図して描かれている。

〔二〕 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。なお、設問の都合上、本文には表記を変えたり省略したりした部分があります。

●缶コーヒーのコンセプト※

① そもそも「コンセプト」とは、ビジネスでよく使われる言葉です。缶コーヒーを例に考えてみましょう。1992年にサントリーから販売開始された「BOSS」。よくよく考えてみると、面白い名前ですよ。コンセプトは「働く人の相棒」だそうです。毎日働く人に寄り添い、リフレッシュできる一瞬をサポートする。そんな想いが込められています。

他の缶コーヒーも、アサヒ飲料Wondaの「目覚めの一杯」、UCCBLACK無糖の「コーヒー好きのためのブラックコーヒー」などと、それぞれ別の方向性を打ち出しています。どうしてでしょうか？ それは、コンセプトがないと「誰がいつ飲んでもいいですよ」というふんわりとした訴求しかできないので、消費者から選ばれづらくなるからです。そのため、売れている商品には必ずと言っていいほど良いコンセプトがあります。また、他社と同じようなありふれたコンセプト（たとえばBOSSに対して「PARTNER」など）をつけてしまうと、既にあるブランドとの真っ向勝負になるわけで、分が悪いかもしれないですよ。 X、他社とかぶるようなコンセプトもビジネスでは避けられています。

そう、ビジネスにおけるコンセプトとは「他社とは違う、独自の立ち位置」を決めるためにあるんです。言い換えると、ビジネスにおけるコンセプトとは一貫して他の存在から浮き続けるための芯のようなものなんです。

●浮きたくない個人と浮きたい企業

Y、「浮く」という言葉が出てきました。ここで不思議なことに気がつきませんか？ 私たちは一人の人間としては社会から浮くことを恐れています。企業はむしろ浮いた存在であろうとしているんですね。

もちろん個人と法人では生存戦略がちがいます。個人は集団で生活した方が、攻撃力も守備力も高まり、ピンチのときでも生き延びる確率があがります。だから浮かない方がいい。ひるがえって法人は他社と立ち位置がかぶると、不当な値下げ競争などに巻き込まれて倒れるリスクも上がる。だからこそ参入障壁をつくりながら、他社が浮いてこれない場所に浮くのです。

個人は浮かない方がよくて、企業は浮いた方がいい。

これが長いあいだ日本社会の常識でした。特に、第二次世界大戦敗戦後の日本では工業化社会へと一気に突入していききましたから、工場のライン仕事とか企業のトップダウン（社長や上司が決めたことに部下は従って働く方式）の中で「浮かない」人の方がいいと評価されてきました。「従順な部品」として育つ方が、ありがたいわけです。つまり、思考停止して、先生や社長の言うことに疑問を持たずに生きることが、社会の繁栄や企業の成長につながっていたのです。

ところが時代は変わりました。たとえばここ何年かビジネス界では「自分のタグ（＝強み）を明確にして発信しよう！」という動きが増えています。私には人と違う魅力や特技や趣味がありますよ、他者にはない力がありますよ、ということ周囲に訴える必要性が増えてきているのです。仕事をする上でも、希少性の高いスキルを持つて

いる人が重宝されています。

友だちと全然違う考えを持っていること。既存の教育システムになじめないくらい周囲と違う生き方をしていること。他の誰も興味がないことに没頭している経験。こうした「浮いている」ことが、特にこれから日本で生きていく上では極めて重要です。なぜなら平成以降の30年は、「みんなが同じようなことを考えて、同じような行動をとった結果、みんなで沈んでいる」ような状況でしたが、それはいよいよ終わりだからです。そう、時代が変わったのです。

② 私たちは、むしろ浮くことを期待され始めている。

缶コーヒーが、他の商品群に埋もれないためにコンセプトを持つように、私たち一人ひとりにも、自分を際立たせるコンセプトが必要になってきているともいえるのです。「社会のために、人と同じように振る舞いなさい」から、「社会のために、それぞれちよつとずつ人と違うことをやってみませんか」とお願いされているようなものです。どうでしょうか。開放的な時代だと感じますか？もしかしたら、人によってはかえって身動きがとりづらいつと感

### ● 1億総浮いている社会

でも、そもその話として、全く浮いていない人なんているのでしょうか？つまり、「社会と自分はバッチリ気が合っていて、なんのストレスもありません！」という状態ということ。もしそうであれば、この本はあなたに

とって何の意味もありません。今すぐ焚き火にくべるか、枕の下にでも入れて安眠グッズにしてください。でも、おそらくそんな人はいないでしょうし、ある意味では不可能ではないかと思えます。

また、「浮いていない」とは、先人や先輩たちが築き上げてきたルールに100%うまく適応できている状態なわけですが、そのルール自体が疑わしい場合もあります。もし現状のルールが「完成品」でありこれ以上改善できない「極み」まで達しており、かつ「未来永劫有効」である場合には、浮いていないことは確かにとっても望ましいでしょう。でも、社会とはそんな固定的なものでしょうか？

もちろん、たとえば憲法は、私たち国民の人権や権利を保障するために、相当完成度の高いルールであることは間違いない。Z Z そんな憲法ですら、改正の議論が湧き起こりますよね。なおかつ、ややこしいこと（あるいは望ましいことに）、憲法以外にも法律や、学校の校則、会社の社則と、無数に決まりがあります。

それだけではなく、「暗黙のルール」もありますよね。なんとなく部長と毎日ランチに行かなくちゃいけない。なんとなく部活の試合中はヘラヘラ笑ってはいけない。なんとなくAさんがその場にいるときは、Aさんに話題を集めなくてはならない。明文化されたルールと暗黙のルールがわんさか敷かれているのがこの現代社会なのです。

③ 法律や校則、あるいは暗黙の了解。

私たちはルールの地層の中で生きている。

さて、極論すれば、このあらゆるルールに適応できている状態が「浮いていない」ということです。どうでしょう。普通に考えれば難しすぎませんか？だって、このルール地層、相当積み重なってますよ。そのすべてに合わせ

ろなんて言われたって、気が遠くなります。「ルールを守れない方が悪い」「社会についていけない人に責任がある」と糾弾するのは簡単ですが、果たしてそれは正しいのでしょうか。このデータを見てください。

- ・不登校で学校に行けていない子は約34万人（2024年発表、文科省調査）
- ・発達障害の可能性がある小中学生は8・8%（2022年発表、文科省調査）
- ・日本人の約40%、だいたい3人に1人が孤独（2025年発表、内閣府調査）
- ・日本で仕事に満足している人は29%（2023年発表、PWC調査）

現代は、日本における「社会から浮いてしまった人」が、歴史上一番多い時代と言えるかもしれません。こうした明確に「浮いている」ことがデータとして現れていなくても、「学校に行きたくない」「今の会社がどうにも好きになれない」、あるいは「エレベーターに乗るときはお静かに、というルールが納得できない」など、人知れず浮いている人も多いでしょう。そう。浮くことは不安だけど、実はだれもが浮いているのです。

### ●なぜ私たちは浮きたくないのか

みんな多かれ少なかれ浮いているのにもかわらず、なぜ私たちは浮くことをこんなに恐れるのでしょうか。理由のひとつに、「同調性バイアス」<sup>④</sup>があげられます。これは、みんなと同じ選択・行動をし、集団の一員でいることに安心感を得られ、逆の場合には不安感を覚えるという働きです。私たちの遠い先祖が集団で暮らすことを選択したときから、協調性は重要な能力になったからです。

同調性バイアスに従って生きるとは、園児たちが散歩カートに乗りながら散歩をするようなものです。引率<sup>いんそつ</sup>してくれる先生、カートを押してくれる先生がいる。自分で意思決定する必要はないし、自ら動かなくてもいい。楽で安心です。

これが、カートの中の環境<sup>かんきやう</sup>が快適で、先生たちのリードに間違いがなければ、全く問題はありません。ところが時代は変わりました。「先生たち、堂々とカートを押しているけど、この先は断崖絶壁<sup>だんがいぜつぺき</sup>なんじゃないか!？」と思う人が増えてきています。「赤信号<sup>⑤</sup>みんなで渡れば怖くない」といいながら、車がビュンビュン行き交う車道に突っ込んでいることがあちこちで起こっています。

同調性バイアスに従いすぎて、一枚岩になりすぎることにもリスクがある時代。だからこそ「社会から浮く」ことは、自分の人生を安全に進むために、あるいは社会全体に健全な変化を起こすためには必要なことです。このことは、100回伝えても伝えきれないぐらい大事なことです。

（澤田智洋『人生にコンセプトを』筑摩書房）

※コンセプト……作品や商品を作り出す際に土台とする考え方や構想。

※訴求……広告や販売などで、消費者が買う気を起こすように働きかけること。

※PARTNER……パートナー。共同で仕事をする相手。相棒。

※参入障壁……新しく業界に入つてしようとする企業にとつて、入りにくいと感ずる障壁のこと。

※未来永劫……未来にわたつて永遠に。

※糾弾……問いただして、とがめること。

※一枚岩……一枚の板のように組織や団体がしつかりとまとまっていること。

問一 □ X～Zに入る語として適切なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア さて イ しかし ウ つまり エ だから オ たとえば

問二 線部①「コンセプト」とありますが、企業が商品に「コンセプト」をつける理由を、四十字以内で説明しなさい。

問三 線部②「私たちは、むしろ浮くことを期待され始めている。」とありますが、どのようなことですか。それをもっとわかりやすく説明した一文を本文中から探し、最初の五字を抜き出して答えなさい。

問四 線部③「私たちはルールの地層の中で生きている。」とありますが、どのようなことですか。四十五字以内で説明しなさい。

問五 線部④「同調性バイアス」が働いている例として適切なものには○、適切でないものには×で、それぞれ答えなさい。

ア レストランで自分が注文する料理を決めたが、友達を選んだもののほうがおいしそうに感じたので、友達に合わせて注文を変えた。

イ 学芸会で劇をするかどうかをクラスで話し合っって決めるときに、自分は反対だったがクラスの大半が賛成していたので、意見を言うのをやめた。

ウ 新しい服を買うときに自分が気に入ったものがあつたが、一緒に買い物に来ていた友達がみんな他の服をすすめてきたので、その服を買うことにした。

エ SNSで話題になっている商品を買おうとしたが、その商品を批判しているコメントを見かけたので、買わないことに決めた。

問六 次に示すのは、線部⑤「赤信号みんなで渡れば怖くない」といいながら、車がビュンビュン行き交う

車道に突っ込んでいることがあちこちで起こっています。」について、五人の生徒がそれぞれの意見を述べている場面です。筆者が述べている内容に即しているものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア (生徒A) …私も、周りの人もしているからという理由で赤信号でも渡ってしまったことがあるよ。それが危険であることを忘れてしまうと、事故にあう可能性が高くなるよね。

イ (生徒B) …ここで筆者は、自分以外の人が持っている意見に従いすぎてしまい、本当の自分が分からなくなってしまうことの危険性を伝えたいのではないかな。

ウ (生徒C) …そもそも、最初に赤信号でも渡ってしまった人が間違っていることに周りの人も気づくべきだよ。それに気づかずに見過ごしてしまうことが多くなっているのかもしれない。

エ (生徒D) …筆者は、みんなと同じ選択や行動をして、その中にいることで安心感を得て、気づかずに危険な方向に進んでいることがあるということを示しているよね。

オ (生徒E) …確かに自分も、周りの状況に疑問を持っていても意見を伝えられないときがあると感じましたよ。周りの目を恐れず自分の考えを言えるようにならないといけないね。

問七

この文章の内容の説明として適切なものを次の中から二つ選び、記号で答えなさい。

ア 人は、集団で協力をしながら生活したほうが生存競争の中で生き残っていけるため、浮かないように過ごすことが大切である。

イ 最近では、周りと競争しながら成長していこうという考えが主流になってきているため、自分だけの強みや魅力を発信している人々が注目されている。

ウ 社会の中に存在しているルールには完璧なものではなく、何かのルールに完全に適応できているとしても、世の中から全く浮いていない人はいない。

エ 現代は、「社会から浮いてしまった人」が一番多い時代ともいえるため、その人々を救うという考えから、浮いていることを悪としない社会のあり方が求められている。

オ 周りの意見に何でも合わせようとしないで、浮くことを恐れず自分の意見を大切にすることが、安全な人生を歩んでいくためには必要である。

〔三〕

次の各文の——線部について、カタカナを漢字に、漢字をひらがなに、それぞれ直しなさい。

- ① ジョウリユウ水を実験で使用する。
- ② オーケストラのコウエンを鑑賞する。
- ③ 森をサンサクする。
- ④ 鏡に姿をウツす。
- ⑤ この家屋には三人家族が住んでいる。



